信ぜざる者 コブナント 第2部

邪悪な石の戦い

下

ステファン・ドナルドソン
小野章／倉本護 共訳

評論社

商標登録番号 第852070号 登録許可済

第Ⅱ部 邪悪な石の戦い 下〈信ぜざる者コブナント〉4

昭和59年11月30日 初版発行　　定価 1,800円

訳者　小野　章
　　倉本　護

発行者　竹下　晴信

印刷所　三倉印刷
製本所　小林共文堂

発行所　株式会社 評論社
（〒162）東京都新宿区筑土八幡町17
電話代表（260）9401
振替東京 8－7294

ISBN4-566-02079-7

<検印省略>

落丁・乱丁本は本社にておとりかえいたします。　(A—1)

第Ⅱ部

邪悪な石の戦い 下

〈信ぜざる者コブナント〉 4

ステファン・ドナルドソン　小野　章・倉本　護　訳

THE ILLEARTH WAR

by

Stephen R. Donaldson

Copyright ©1977 by Stephen R. Donaldson
Japanese translation rights
arranged with Ballantine Books Inc.,
through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo.

目次

16 強行軍 7
17 ツルの話 43
18 「運命の退却」 79
19 サウスロン荒野の廃墟 129
20 ギャローティング・ディープ 163
21 レナの娘 197
22 アナンデバン・ヤハナ 223
23 知識 245
24 大地の根への下降 278
25 第七の倉 311

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

26 ギャロウズ・ハウ 336
27 癩者 356

第Ⅱ部　邪悪な石の戦い　下

16　強行軍

そんな気持ちを抱きながらも、トロイは心残りを感ぜずにはトロスガードからリル川の浅瀬を渡ることはできなかった。かれは太陽の輝くレベルウッドの美しさ、古文書博士たちの素朴な友情を愛した。それらを失いたくなかった。だがふり返らなかった。エレナがアティアランの夫トレルのもっともな怒りと悲しみをしりぞけた理由がわからなかった。そして今や、これまで考えたこともない根本的な方法で、この戦いにおいて自分自身を証明しなければならないだろうと感じた。おれは希望から生み出されたものであって、絶望から生まれたものではないことを証明しなければならないだろう。

おれは勝たなければならない。

おれは勝たなかったら、失敗者だけではすまないのだ。おれは積極的に悪をもたらしたことになる――それは自分自身の愛とか意志を無視しても、この国に対して裏切り行為を犯したことになるのだ――コブナントより悪い。少なくともコブナントは、信じられることによって嘘をつくことになるのを避けようとしているからだ。それなのにこのおれ、ハイル・トロイは、故意に信頼や責任や指揮権を得ようとしてき

た――

いや、そんな考えは耐えられない。どんなことがあろうと勝たねばならない。

かれは南の丘の頂上を越えると、メリルの歩調を落とし、旅にむく進み方にし、ムホラム王や残る十八人の血の衛兵たちが追いつけるようにした。それから、ムホラムを非難するのを避けようとして、声をぐっと押さえ、小声でいった。「なぜかの女はかれを連れて行くのだ。かれはトレルの娘を陵辱したんだ」

ムホラムがおだやかに答えた。「司令官のトロイ、わが友よ、大王が選択の余地がほとんどないことを理解しなければいけない。かの女が職責を果たす道はせまく、危険だらけなのだ。七番目の倉を捜し出さなくてはならぬ。それには古王コブナントを連れて行かねばならぬ――白い金のためだ。掟の杖で、かれの指輪が汚辱の王の手に渡らないことを確実にしなければならぬ。その上、かれがこの国にはむかう場合は、かれの身近にいて――かれと戦わねばならぬ」

トロイはひとりうなずいた。それはかれにもわかる理屈だった。かれは体をふるわせ、自分の本能的な抗議を押さえた。やっとの思いで、口を開き、ため息をついていった。「ムホラム、話があるのだ。わたしはこの戦いを終えて――ふり返って見て、かわいそうなアティアランが満足しているとわたし自身にいえるようになったら――わたしは二、三年休暇をとるつもりだ。わたしは春の祭りを見られるまで、アンデレンの野に身を落ち着け、筋肉一本動かさないつもりだ。さもないと、あのいまいましいコブナントがわたしより幸運なのを決して許すことができないだろう」だがかれが自分より幸運なといったのには別の意味があった。こうした選択しかないことが今わかったが、エレナが自分をではなく、コブナントを選んだことを考えると胸が痛んだ。

しかし、ムホラム王はかれの心をわかっていたが、かれの言葉の意味よりも、むしろそのいった言葉を如才なく引きついでいった。「ああ、もしわれらが勝利を得るなら」――ムホラムはほほ笑んでいたが、かれの話し方は真剣だった――「あなたはひとりではないだろう。今度、月のない夜が春の中日に重なったとき、国の住民の半分はアンデレンにいるだろう。まだ生きている者でアンデレンの光の踊りを見たことがあるものはほとんどいないのだ」

「それなら、まず最初にそこへ行くつもりだ」とトロイはこの会話をつづけようとして、つぶやいた。だがその時、かれは話を信ぜざる者の話題に返さずにいられなかった。「ムホラム、あなたはかれに憤りを感じないのか？　あんなことをしたのに？」

落ち着いた率直な態度で、ムホラム王はいった。「わたしはかれに憤りを感じなければならないほどの特別な美徳をもってはいない。他人の弱さを批判するには力がなければならぬ。わたしにはそんなに大きな力はない」

この返事を聞いてトロイはびっくりした。一瞬かれはムホラムを見つめ、それは本当なのか、と無言で問いかけた。あなたはそう信じているのか？　そしてかれはムホラムがそれを固く信じているのを知った。困惑して、トロイは顔をそむけた。

血の衛兵に囲まれて、かれとムホラム王は曲線をえがく道にそって丘陵地帯を抜けていった。その道は大体において東南東にむかっていたが、かれらは軍団を途中でつかまえるつもりだった。

一日が過ぎると、トロイは進軍している自分の軍隊のことをまえよりも考えられるようになった。さまざまな問題がいっぺんに心に浮かんできた。行軍する沿道の村々は戦士たちに十分な食料を供給できたろ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うか？　第一大隊長アモリンは進軍する速度を維持できたろうか？　こうしたことが気にかかったせいで、いつのまにか不吉な予感や胸のうずくような喪失感を忘れられた。かれは別人になった――盲目で自信のないこの国に来たよそ者という感じが薄れ、王の居城の軍団の司令官といった意識が強くなった。こうした気持ちの変化がかれを落ち着いた気分にさせた。それでいっそうくつろいだ気持ちにもなった。

かれは先を急ぎたかったが、そうした気分をぐっと押さえた。ラニインにとって今度の旅のこの部分ができるだけ楽なものであるようにしておきたかったからだ。けれども、かれがレベルストンを発って八日目になるその日の終わりまでに、かれとムホラム王と血の衛兵たちは活気を取り戻しているトロスガードをあとにしていたのだった。一日たった五十一マイル行くだけなのに、進むにつれ、地形がみるまに変わった。かれらの東と南東はいっそう厳しい中つ野の国だった。この広大な地域では、けわしい大地の岩がトロスガードよりも地表に迫っているようだった。中つ野は生きものを維持はしたが、その発育を促進することはなく、不屈で勇敢な人びとだけが住んでいる。

軍団の構成員となった男女の大半は中つ野の村々から来ていた。これは伝統的にそうなっており――十分理由のあることだった。この国の大きな戦いで、侮蔑の王の軍隊はレベルストンへ近づくために中つ野を押し通った。それゆえ、こうした野は汚辱の王の悪意の矢面によく立たされたのだ。中つ野の人々はこのことを覚えていたので、古文書学校に息子や娘たちを送り、防衛部門の技術を習得させた。

その夜キャンプしたとき、トロイは指揮下の戦士たちが自分に対して深い個人的な信頼を寄せてくれているのを強く感じた。かれらの故郷や家族の運命はトロイが成功するか失敗するかによってきまる。かれの指揮するままに、かれらは生殺しのような地獄のこうした強行軍に耐えているのだった。

そしてかれはこの戦いが明日のうちに始まるだろうと思っていた。その頃になれば、汚辱の王の軍隊の前衛がミシル谷の西端に到着し副司令官のクアンやカリンドリル王やベレメント王と遭遇するはずなのだ。かれはそう確信していた。九日目の夕方より遅くなることはない。そして、男や女たちが死にはじめるだろう——おれの戦士たちが。血の衛兵たちも死にはじめるだろう。かれはかれらのかたわらにいて、かれらを死なせずにおきたかったが、それもできなかった。おまけに、「運命の退却」への行進は、そうするほかはない石うすのように軍団をすりつぶしながら、あくまでもつづけられるだろう。まもなく、トロイは毛布にくるまったまま体を伸ばし、大地に顔を押しつけた。それが取り乱さずにいられる唯一の方法であるようだった。

かれは自分の戦略のひとつひとつを再検討して夜の大部分を過ごし、どんなあやまちも犯さなかったと信じようと努めた。

翌朝、かれはもはや一刻の猶予も許されないと感じた。そしてもの思いにふけるたびに、メリルの歩調をせきたてはじめた自分に気づいた。それでムホラムの方をむき、王に自分に話しかけ、自分の心をまぎらせてくれと頼んだ。

それに応え、ムホラム王はゆっくりと瞑想するような、半ば歌うような調子で、かれらと「運命の退却」の間にあるさまざまな伝説をもつ、あるいはこの国に影響を及ぼす地域についてトロイに語りはじめた。特にかれは原初の森、隻手のベレックの時代以前の古い昔にこの国をおおっていた巨大な森とその森の守護神とどうもうな敵、レーバーたちにまつわるいくつかの昔話を語った。木々がまだ目覚めていた時代には、森の守護神たちはかれらの意識を育て、ツリヤ、モクシャ、サマディから身を守ることを指導し

たのだ、とムホラム王はいった。だが今、もしいにしえの話が真実を語っているとしても、原初の森や森の守護神たちの存在を積極的に示すものはこの国には何も残っておらぬ。あるのはギャローティング・ディープのカエロイル・ワイルドウッドの不気味な森だけ。そしてギャローティング・ディープにわけ入る者は、事情はどうあろうとも、二度と戻らぬ。

この暗い森は、さいごの丘のかなた、軍団の進軍路の近くにある。

ムホラムが話し終わると、トロイは自分自身のこととこの国に対する自分の反応についてしばらく話した。かれはムホラムに親しみを感じ、エレナ大王がまさにかれの国家観を象徴する存在であることを語った。だんだんとくつろいだ気持ちになり、自分自身に対して、だれがこの国に自分を呼び出したかはどうでもいいことだ、といえるようになった。おれは現にあるおれなのだ。おれはやり遂げてみせるぞ！

かれとムホラムはその日の午後の三時頃に悪戦苦闘のていで進軍する戦士たちに追いついたとき、あまり驚かなかった。ただかれはショックをうけた。

軍団は予定より半日近く行軍が遅れていたのだ。

戦士たちはためらいがちに歓声をあげてかれを迎えたが、その歓声も大王が一緒でないと気づくと、やんでしまった。だがトロイはかれらを無視した。第一大隊長アモリンのところへ馬をまっすぐに走らせると、かれはどなった。「きみたちは遅いぞ！　太鼓のリズムを早くしろ！　この調子だと、われらは一日半はまちがいなく遅れてしまう！」

アモリンの歓迎を見せた顔は無念そうな顔に変わった。そしてかの女はすぐさま鼓手たちのところへ飛んでいった。いっせいに、ため息をつくように苦痛に満ちたうめき声をあげると、戦士たちは歩調を速め、

太鼓のリズムに合わせた。そしてしまいにはかれらは半ば走るような歩調になった。すると司令官のトロイは行軍する戦士の列のかたわらを馬で往復し、怒った態度で新しいリズムをとらせようとした。かれはひとつの戦士大隊がわずかに遅れていると知ると、その隊の若い鼓手の顔にむかってまともにどなった。「神に誓って！　わたしはきみのおかげでこの戦いに負けたくはないぞ！」かれは恥じいった隊長の耳のそばで太鼓のリズムを手拍子で打ってみせたので、やがて鼓手は正確に打てるようになった。

かれは狼狽した気分から立ち直ってはじめて、九日間の苛酷な行軍によって変わりはてた軍団の姿に気づいた。その時、かれはできるものなら自分の冷酷な命令を取り消したいと思った。戦士たちはたいへんな苦しみを味わっていた。全員といっていいほどの者が足をひきずり、切り傷や筋肉の裂けや骨の打撲傷のせいで苦痛に絶えず悩まされながら、てんでばらばらに行軍している。多くの者は疲労困憊し、汗も出なくなり、ほてり紅潮した顔は泥だらけで、顔は黄色く、気ちがいじみた容貌になっている。少なからぬ者が肩から血を流していたが、荷物の背負いひもですれて赤はだになったからだった。かれらは不とう不屈の精神をもっていたにもかかわらず、レベルストンで訓練されてきた整然とした隊列を組むことを忘れているように、その行軍ぶりはばらばらだった。

そして、予定より遅れていた。かれらはまだ「運命の退却」から五百四十マイルも離れていたのだった。

かれらがよろめき、疲れ果てた状態でその夜、野営する頃には、トロイは気も狂わんばかりになってかれらを救う方法を捜し求めていた。ただ決意だけでは十分ではない。

同行していた木の伝説の語り部や石の語り部が焚火をはじめるとすぐ、ムホラム王は軍団のために何か役立とうとして出て行った。かれは戦士大隊から戦士大隊へと回って、料理番の手助けをした。かれの青

い火はそれぞれのシチューなべの食べ物に効果を与え、それをおいしくし、その食べ物をいっそう健康的な活力にあふれたものにした。そして食事がすむと、かれは軍団じゅうを歩きまわり、姿を見せることで慰めを広く与え――戦士たちに話しかけ、かれらの打ち傷の手当てをしたり、包帯を巻いてやったり、笑うだけの力を奮い起こせる者には冗談をいった。

ムホラム王がこうしている間、トロイは部下の将校たち、大隊長や隊長に会った。かれはエレナ大王の不在の理由を説明したあと、行軍の問題を取り上げた。心痛む思いで、こうした試練をどうにも避けがたい、あとになっては取り返しがつかないほど必要なものとしている状況を再検討した。次にかれは細目に着手した。かれは革の水さしを戦士たちの間にまわす計画をまとめた。そうすれば、水さしが部隊の間に絶えまなくまわされ、体がほてり過ぎた戦士たちに水を与えられるのだ。かれは肩から血を流している戦士たちの荷物を馬で運ぶ手はずを整えた。そして最も疲れ切っている戦士たちが馬の背で休めるように、鼓手以外のすべての騎馬の将校たちに二人乗りするように命じた。そしてかれはこうした将校たちに行進中、徒歩で行軍している戦士のためにアリアンタを採取するようにいった。血の衛兵たちにはすべての偵察活動と飲料水の確保といった任務を与え、こうして戦士たちを助けるためにもっと馬たちを解放した。それからかれは大隊長と隊長をそれぞれの部隊に送り出した。

かれらが去ると、第一大隊長のアモリンがかれに話をしにきた。かの女の無愛想で、ふきげんな顔は今にも何か険悪なことを口にしそうだったので、かれはすばやく先手を打った。「アモリン、ちがうのだ」とかれはいった。「わたしはだれか他の者とあなたを交代させるつもりはない」かの女は抗議しようとしたが、かれはもっとおだやかに急いで言葉をつづけた。「われらが予定より遅れているので、わたしの言い

方があなたを非難するように聞こえたのは知っている。だが、それは本当はわたし自身を非難しているからにすぎない。あなたはこの任務に最もふさわしい人なのだ。軍団の者はあなたを尊敬している——丁度、クアンを尊敬するのと同じにだ。戦士たちはあなたの経験と誠実さを信頼している」沈んだ様子で、かれは言葉を結んでいった。「このようなことがあったあと、みんながわたしをどう見るかわからない」

たちまち、かの女の疑いは消えた。「あなたは司令官です。だれがあなたに異議を唱えたりできましょう?」かの女は、だれでも異議を申し立てる者がいたら、こぶしに物をいわせて見せるという口調でいった。

かれはその忠誠心に心を動かされた。自分がそれに値するという自信がなかった。だがそれに値する者になりたかった。かれはこみ上げる感情をぐっと押さえて、答えた。「われらがこのペースを維持するかぎり、だれもわたしに異議を唱える者はいないだろう。それにわれらはこのペースを維持するつもりだ」心の中で、かれは、わたしはクアンに約束したのだ、とつけ加えた。「われらは遅れた時間を取り戻すのだ——しかも、それを、この中つ野で行うことになるだろう。ブラック川の南では、地形はもっと悪くなる」

第一隊長はかれを信頼しているようにうなずいた。

かの女が立ち去ると、かれは毛布に入り、人にはわからぬまっ暗闇の中で頭をたたきつづけ、自分の窮地を脱すべき代案を捜し求めた。だがこうした強行軍をしなくてすむような考えは浮かばなかった。かれは眠ると、ぱっくり口を開いた墓穴でもあるように戦士たちがよろめき歩きながら南へと進軍する姿を夢に見た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com